

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2024. 9. 1.

文責／JUN

宮沢賢治の世界と私 —「やまなし」の授業に際して

1 宮沢賢治の世界との出会い

私が、宮沢賢治の作品で初めて授業をしたのは、まだ教師になったばかりの頃でした。当時の教科書に「虔十公園林」が掲載されていたからです。その頃、私は、宮沢賢治という作家についてなにほどのことも知りませんでした。ですから、無知の状態のまま、私も読者の1人になって子どもと同じレベルで読んだというのが正直なところでした。

私は、この後、賢治の作品を次々と読むことになります。「よだかの星」「注文の多い料理店」「ゼロ弾きゴーシュ」「風の又三郎」、そして、とうとう「銀河鉄道の夜」に行き着きました。正直に言えば、「銀河鉄道の夜」は、それまで出会ったことのない、それまで私が読んでいた物語とは次元の違うものでした。そのとき私は、想像を越えた不可思議な賢治の世界に足を踏み入れ、そして、それ以降、その世界をさまよい、その不思議な魅力に取りつかれていったのでした。

「やまなし」で初めて授業したのは「虔十公園林」を授業してから10年は経っていたでしょうか。そのときどういう授業をしたのかははっきり覚えていません。ただ、一つだけ、自分のわからないものを子どもにわからせるような授業はしないでおうと思ったことだけは覚えています。

それから三年後、「国語教育を学ぶ会」の研究大会が四日市で開かれ、私は、賢治の「なめとこ山のくま」をテキストとして取り上げ公開授業をしたのでした。

その頃からでした、私が賢治の詩集を読むようになったのは・・・。

賢治の詩は、私の文学教養の容量をはるかにこえるものでした。わかんとかわかんないとかいうことをこえて、私はただ賢治の詩に次々と目を移していきました。読んだとはとても言えないような読み方でしたから、目を移したという言い方がいちばんぴったりでした。

私は、これらの詩群とそれまでに読んだ物語とがどうつながっているのか、そんなことを考え続けました。けれどもそれはなかなか姿を現してはくれませんでした。

私は、賢治の作品の舞台となっている東北に行くことにしました。盛岡まで行って、レンタカーを借りて、ここぞと思う所に行ってみる、そういう旅を二度にわたって行いました。その経験の上に、もう一度作品群を次々と読むことにしたのです。

そうして私が身につけた賢治の作品の読み方は、不可思議さも、わからなさも、そう感じるまま受け入れて読むこと、その不可思議さ、わからなさこそ、賢治の賢治らしいところなのだと思うことにする、そういうものでした。

そう思うようになると、おもしろいことに、賢治の作品が私のからだに入ってきたのです。そして、その物語が、私のからだのなかで自在に動きだしたのです。

どうしてそういうことになったのでしょうか。当時、私にはよくわかりませんでした。でも、今になって思うと、わかろう、わからなければという考え方が遠ざかったとき、私は、自分の感覚で読むようになったのだと思います。何が見えたのか、どんな世界が目の前に浮かんだのか、そこで私はどんな心持ちになったのか、何を感じたのか、それを楽しむような読み方になったのです。文学はわかろうとすると遠く離れていくものですが、わかるわからないにかかわらずそのまま味わおうとすると自分のなかに入ってくる、こうして私の賢治作品の読み方が生まれました。

2 賢治の作品は、もらってきたもの

生きている間に発刊されたたった一つの童話集『注文の多い料理店』の「序」に、賢治は次のように書いています。

序

わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものがすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということ、わたくしはそのとおり書いたままです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになることもあるでしょうし、それっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい(最後にはという意味)、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

大正十二年十二月二十日

(新潮文庫『注文の多い料理店』平成2年5月25日刊)

教科書の学習材「やまなし」を読むとき、私はいつもこの序文を頭に浮かべます。するとそのたびに、こういうふうに読んでねと語り掛けられている気がしてくるのです。

「なんのことだかわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしもまた、わけがわからないのです。」

そうなんだ！ それをわかろうとして読むことなんてナンセンスなんだ。

でも、どうして、賢治自身もわからないのでしょうか。それは、賢治の作品は、「わたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきた」ものだからです。賢治は、自分がつくったのではなく「もらってきた」と言っているのです。そして、「どうしてもこんなことがあるようでしかたないということ、わたくしはそのとおり書いたままです」と書いています。林や

野はらや鉄道線路を眺めていると、「どうしてもこんなことがあるようでしかたがない」気持ちになった、それをそのまま書いたおはなしだと言うのです。

だとすれば、賢治のこういう童話を読むということは、私たちもまた、「どうしてもこんなことがあるようでしかたがない」という気分で、「わかろう」とするのではなく、わからなくてそのまま、不思議な感覚になったらその感覚のままで、でも、おもしろいなあとでも感じながら、味わえばよいということになります。

この序文には、賢治の童話を読むとき大切にしたいことがもう一つ書かれている、そう思います。それは、「ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと」と書いているところから感ずることです。どういうことかと言うと、私たち読者も、「ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったり」しているようにして読むということです。

この後で述べますが、私は、「やまなし」を読むとき、「谷川の水底の視点で、あたかも目の前にこの光景があるかのように読み描いてもらいたい」と思っています。つまり、そのような読み方こそ、序文に書かれている「かしわばやしの青い夕方をとおりにかかった」ときに目にしたまま読む、「十一月の風のなかに、ふるえながら立ったり」しているように読むという読み方だと思うからです。

3 賢治と存在のゆくえ

賢治は、生きている間に一冊の詩集と一冊の童話集しか出版していません。童話集は『注文の多い料理店』ですが、詩集は、『春と修羅』です。その詩集は次のようなことばの序で始まっています。

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です。
(あらゆる透明な幽霊の複合体)
風景やみんなといっしょに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です。
(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
風と鉦質インクをつらね
(すべてわたくしと明滅し
みんなが同時に感ずるもの)
ここまでのもちつづけられた

皆さんは、この文をどのように読まれるでしょうか。ここで私の感じたことを詳述するつもりはありません。ただ、賢治が「わたくしという現象は」と書き出していることに注目してほしいのです。初めてこれを読んだとき、賢治が自分の存在を「現象」と言っていることに驚きを感じました。

「象」は「象形」の「象」ですから「かたち」という意味です。だから、「現象」とは「かたちが現れる」という意味になります。それは、「自然現象」という言葉からもわかりますが、何もないところに、霧が湧き起こり、そして消えていく、それが「現象」です。賢治は、存在する自分自身は実体ではなく現象だということです。何もないこの世界にふっと湧き起こるように姿を現し、そしていつかみえなくなる、そういう存在だということです。そう考えたとき、そこに、賢治のすべての出発があるのかもしれないと思いました。そう思って私の読んだ童話や詩を思い起こしたとき、賢治は、その短い生涯を通じて、「わたくし」とは何なのか、今ここに生きている自分自身とはどういうものなのか、その存在のゆくえを考え続けた人であったように思ったのです。なんだか賢治が身近に感じられます。それは、私自身が、傘寿と呼ばれる年齢になったからかもしれません。

存在のゆくえということ言えば、「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」(詩「無声慟哭」でそう表現しています)である最愛の妹トシを失ったあと出かけた樺太への旅はまさにそれを追い求めたものだったように思われます。

賢治の存在のゆくえ探しは、今、生きている現実の世界だけでなく、過去にも未来にも結びつき、宇宙ともつながり、四次元の世界にも広がり、死者でさえも呼び戻しています。だから、賢治にとって「わたくし」は、実体のあるものではなく「現象」なのかもしれません。

このことは、「銀河鉄道の夜」に、深く反映されているのではないのでしょうか。

そう考えると、賢治の世界観、人間観は、世俗的なものをこえていると思われれます。だから、常識的にわかろうとしてもわからないのです。

賢治の、存在のゆくえ探しがどんな世界観のもとになされていたかを述べましたが、ここまで読んでいただければ気づいていただいたと思います。それは、前掲した『注文の多い料理店』の序に書かれた次のことばと深くつながっているということに。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

これは、賢治が作為的に言っているわけではありません。自分の創作をへりくだって言っているわけでもありません。賢治にとってはまさにその通りのことであつたと思われれます。つまり、過去にも未来にも結びつき、宇宙ともつながり、四次元の世界にも広がり、死者でさえも呼び戻した賢治の世界観は、林や野はらや鉄道線路や、虹や月あかりまでも、ともに生きるものとして迎え入れていたのです。

それは、いわゆるファンタジーと呼ぶ現代の作品と同一にすることはできない感覚です。「のはらうた」の工藤直子とも決して同じにならないと思います。まさに、賢治には、それらの生き物や鉱物（『気のいい火山弾』）も、電柱も（『月夜のでんしんばしら』）が、そう語っていると聞こえ感じられたのです。

賢治の作品の読み方について、こんな雑駁な文章だけで皆さんと共感し合えたとは思われません。けれども、その一歩にはなるかもしれません。

3 「やまなし」のこと

宮沢賢治の作品で小学校の教科書に掲載されているのは「やまなし」と「注文の多い料理店」と「雪わたり」です。その中でもっとも多く見る機会の多い授業が「やまなし」（光村図書）です。

「やまなし」は、五月と十二月の二枚の幻灯で構成された作品です。舞台は小さな谷川の底、その水底で生活するかにの親子の経験が、かにの目線で色彩と情景美たっぷりに描かれています。

前節で述べたことからもう感じていただけたと思いますが、「やまなし」をわかって読むとはなりません。そうすればそうするほどわからなくなり、「わけのわからない物語だ」ということになるでしょう。それは「やまなし」の味わい方としてもっともよくないものです。



宮沢賢治記念館の門の傍らに立つやまなしの木と落ちていた実

わかろうとする読み方でよく行われているのは、「五月と十二月はどう違うか？」とか「『やまなし』という題名にしたのはなぜか？」ではないでしょうか。こういう課題にすると、思考は必ず分析的になります。「分析」の「分」は分けること、「析」は木をおの（斤）で割るという字源ですから細かくするという意味です。つまり、それは文章を分けたり割ったりして、まるで腑わけをするように何かを探し出すことを指します。

私は、文学作品を切り刻むような分析的な読み方には賛成できません。文学も絵画も音楽も、芸術作品は丸ごと、感覚を総動員して味わうものだと思うからです。ところが、授業ということになると、何かを教えなければいけないという観念に縛られるからでしょうか、「わからせよう」という意識が生まれます。しかも、そこに教師が考える「正解」がある場合が多く、授業の目的がその「正解」を読み取らせることになります。そうなったらそれは文学の味わいではなくなります。

しかし、五月と十二月という二枚の幻灯をつなげて読むということは「やまなし」の読みにとって必須のことです。賢治は、冒頭に「小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。」と書き、その二枚の幻灯として五月と十二月を描きだしているのですから、読者である私たちは、当然、二枚ということ意識して読むことになります。そうなれば、その二枚を別々に読めばよいということにはなりません。比較分析的な読み方にしないようそれぞれに描かれている情景を想像する読み方にすると

言え、五月は五月、十二月は十二月と全く別々に読んでいるだけでは、二枚の幻灯がつながった世界としては味わえません。私が言っているのは、比較分析的にということではなく、二つの場面を一つの世界として読み味わうということなのです。

実際、十二月の場面のやまなしが「トブン」と飛び込んでくるところで、私が参観したどの授業でも、子どもたちは五月の場面でかわせみが飛び込んできたこととの違いを語り始めます。飛び込んできたものに対して、子どもらのかにが「かわせみだ」と首をすくめていると記述されているのですから、それはごく自然なことだと考えられます。

ただ、子どもの気づきは、かにの子どもらがかわせみだと勘違いしたということだけになりがちです。もし、五月とのつながりがそれだけに終わると、私が言う青い幻灯二枚の味わいにはなりません。けれども、子どもの気づきがどうであれ、子どもから五月と十二月のかかわりが出てきたことはとてもよいことです。要するに、それをきっかけにすればよいのです。十二月の場面を描く読み方をしているところに、五月の場面の思い起こしが生まれたのですから、それを契機に、五月に戻って音読するなどして、五月のときのことを思いだしながら十二月の情景やそこにいるかにの子どもたちの心持ち、そしてそこから感じられる五月とは異なる情感を味わうようにすればよいのです。

かわせみが飛び込んできた描写と、やまなしが飛び込んできた描写の異なりは、特別なことをしなくても子どもは読めます。大切なのはその後の水底と親子の状況を描くことです。

なるほど、そこらの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。

三びきは、ぼかぼか流れていくやまなしの後を追いました。

五月の日光とは異なる淡い月明かりの水の中に漂うにおい、そして、やまなしの「ぼかぼか」という流れ方が、かにの子どもらをゆったりとした感覚にしてくれています。

まもなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは横になって木の枝に引っかかって止まり、その上には、月光のにじがもかもか集まりました。

というこの後の水面の情景は、

あわといっしょに、白いかばの花びらが、天井ををたくさんすべってきました。

光のあみはゆらゆら、のびたり縮んだり、花びらのかげは静かに砂をすべりました。

という五月の水面(天井)とつながります。その水面の様相は、夜と昼、月光と日光、やまなしと白いかばの花びらというように異なった彩りになっています。かにの子どもになってその水底に身を置くと、彩りの異なりを通じて、ここで、かにの親子は生きているのだという感慨をもたらしてくれます。

五月を意識して十二月を読むということは、かにの親子が生きる二つの場面を一つの世界としてつなげて味わうということです。それは、作品の中で、かにの子どもら自身が全身でそれを感じているはずだから当然のことのように思います。五月と十二月の異なりの意味は何かなどと外側から分析的・解釈的に読むのではなく、かにの子どもたちにとっての、つながる一つの世界として味わう、それが

できるかどうかで「やまなし」の読みの深まりが決まるように思います。

ところで、この二枚の幻灯は「青」です。賢治の童話、詩、短歌にはその「青」がたびたび登場します。賢治にとって「青」とはどういうものなのでしょう。そう考えると、「やまなし」の「青」も、単に谷川の底が青かったからとは思えなくなります。

樺太への旅によって生まれた「オホーツク挽歌」に次のような一節があります。

わびしい草穂やひかりのもや
緑青は水平線までうららかに延び
雲の累帯構造のつぎ目から
一きれのぞく天の青
強くもわたくしの胸は刺されてある
それらの二つの青いいろは
どちらもとし子のもってみた特性だ
わたくしが樺太のひとのいない海岸を
ひとり歩いたり疲れて睡ったりしてみるとき
とし子はあの青いところのはてにみて
なにをしてみるのがわからない

(新潮文庫『宮沢賢治詩集』昭和44年4月10日刊)

どうやら「青」は、賢治にとって、妹トシの存在と死と無縁ではなかったようです。トシを意識するとき必ず「青」が浮かび上がり、常に「青」を意識しながら生きていたのかもしれませんが。そういえば、『春と修羅』の序で、自らのことを「因果交流電燈の／ひとつの青い照明」と言っているし、「やまなし」も二枚の青い幻灯です。もちろん、その「青」ということを、私が感じているように読まなければいけないということでは決してありません。ましてや、唐突に「オホーツク挽歌」を教室に持ち込むなどということは厳に慎むべきことです。私はそういうことを言っているのではないのです。「やまなし」のような賢治の作品には作者の繊細な世界が色濃く表されているのであり、その繊細さに触れた状態で子どもたちの読みに対応できたらどんなによいだろうということなのです。

白いやわらかな丸石も転がってき、小さなきりの形の水晶のつぶや金雲母のかけらも、流れてきて止まりました。

その冷たい水の底まで、ラムネのびんの月光がいっぱいにすき通り、天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう。辺りはしんとして、ただ、いかにも遠くからというように、その波の音がひびいてくるだけです。

十二月の冒頭に出てくる一節です。私は、この文章を読む子どもたちが、谷川の水底の視点で、あたかも目の前にその光景があるかのように描いてもらいたいと願います。そして、その光景が、谷川の底の青い世界をながめてきた自分の心にどういう感覚をもたらし、それを何よりも大切にしたいと思っています。「やまなし」を読むということは、どこまでもそういう読み方によらなければならない、そう思っています。

それには、おだやかに、ゆっくりと、何かを描き出すように、何度も音読をしなければなりません。音読をしない「やまなし」の読み方は考えられません。感性を呼び覚まし、感覚の翼を広げるには、肉声で描き出す音読がなくてはならないのです。もちろん、ただ音読を繰り返しているだけで感性が呼び覚まされることはないでしょう。そこになくてはならないのは教師の感性です。教師が、どう「やまなし」の世界を味わっているか、その微妙な雰囲気、子どもにもたらしめるものを変えるのです。

こうして、作品のことばに触れ、感覚を働かせる営みによって、子どもたちはきっと、ごく自然な形で、五月と十二月を感じ始めるでしょう。それが子どもの口からあふれ出たら、また、そのことを味わうように音読をすることになるでしょう。

子どもとともに読む授業という場では、子どもの感覚を呼び覚ますような読み方をもっとも大切にすべきです。そういう読み方でしか子どもは賢治の世界に入れないと思うからです。

教科書に「なぜ、作者は、十二月にしか出てこない『やまなし』を題名にしたのだろう。理由を考えよう」という手引きがついています。それは、ここまでに述べてきたような二つの幻灯をつなげる味わい方をしない限り感じ取ることはできないでしょう。それをしないで「理由を考える」というような考え方をさせてはならないのです。光村の国語の教科書を使う学校では、間もなく「やまなし」を読むことになるでしょう。そういうこともあり、何年も前からずっと考え続けていたことをここに記すことにしました。

最後に、蛇足になりますが、「現象」という自己の存在に対する賢治の思想について、私のなかにわき起こったことを記しておくことにします。

「現象」を意識し始めたのは、2年前のことです。その年、オホーツク海に見える北海道の学校に行くことになったのです。その時、私は、オホーツクの「青」をこの目で見るができる、と思いました。そして、その「青」を私に感じさせてくれた『春と修羅』に収められた「オホーツク挽歌」をもう一度読んでから、北海道に行こう、そう思ったのです。そうして読んだ「オホーツク挽歌」が、これまで自分のことを実体としてしか見てなかった私の心に、「わたくしの存在は『現象』である」という賢治の言葉をよび込ませることとなったのです。

今、私は、このときのことを思い出しています。そして、改めて、「現象」という言葉を噛みしめました。すると、「わたくし」という「現象」が生まれ、この世の中でかたちづくられている、それは、たいへんな奇跡であることのように思われてきました。そのとき突然、私の中に生まれたのは、それが奇跡だとすると、その奇跡の時間を、正直に、まっすぐにかたちづくり、跡形もなく燃え尽きたい、そして、賢治が「おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることをどんなにねがうかわかりません」と『注文の多い料理店』の序に書いているように、私もまた私の周りにいてくださる皆さんの「たべものになる」ものを生み出す、私の燃焼の意味はそれしかないということでした。

もちろん、こんなこと、「やまなし」の授業で、子どもの前に持ち出すことはありません。そうではなく、これは私自身の心の内に生まれたものです。賢治の作品・詩は、そんな思いまでも私たちにもたらししてくれるのです。